

# 隋代訳経『起世経』『起世因本経』にみる 同時代異訳経典の成立過程

宮 嶋 純 子

The Completion Process of Contemporaneous Different Translations of  
Buddhist Texts from the *Qishi-jing* 起世経 and  
the *Qishi Yinben-jing* 起世因本経 during the Sui 隋 Dynasty

MIYAJIMA Junko

Of the different translations of the *Chang'a Han shiji-jing* 長阿含世記経 “The Longer Āgama Sūtra” – the *Daloutan-jing* 大樓炭経, the *Qishi-jing* 起世経 and the *Qishi yinben-jing* 起世因本経, which explain the Buddhist world view – the *Qishi-jing* and the *Qishi yinben-jing* were translated during the same dynasty. Despite the remarkable similarities between the two translations, as of yet, they have never been subjected to comparative research. This essay addresses the question as to why two translations were made during the same dynasty and turns to sutra catalogues and the biographies of different monks as primary sources. The first translation was undertaken primarily by Juanaguputa 闍那崛多; however, after losing his standing, he was released from his responsibilities. The next figure to undertake the business of sutra translation in the Sui Dynasty was Dharmagupta 達摩笈多, who undertook a new translation of the *Qishi yinben-jing*. This accounts for the presence of two simultaneous translations of the same sutra.

キーワード：『起世経』・『起世因本経』・異訳経典・隋代訳経史

## はじめに

初期仏教教団によって体系化され保持されてきた原始経典である『阿含経』の漢訳には四種——『長阿含経』『中阿含経』『雜阿含経』『増一阿含経』があり、現存するパーリ語阿含経との対応関係については、様々な角度から検討が加えられてきた<sup>1)</sup>。本論で取り上げる『起世経』類はもともと『長阿含経』に集録される一経典であり、全30経中の最後に置かれた『長阿含第四分世記経』とその同本異訳経典であ

---

1) 阿含経の研究史については以下の諸書を参照。前田恵学『原始仏教聖典の研究』山喜房佛書林、1964年。木村泰賢『小乗仏教思想論』明治書院、1937年。

る『大樓炭経』『起世経』『起世因本経』の総称である。

『長阿含経』はパーリ仏典の『長部 (Digha-nikaya)』に相当し、比較的長い経典が集められたものでこの名がある。法蔵部より伝えられたとされる漢訳『長阿含経』は、後秦代に仏陀耶舎と竺仏念によって訳出された<sup>2)</sup>。上述の通り22巻に30経が収録され、全体は四部に分類されている。この30経のうち27経についてはパーリ語『長部』に対応する仏典があるが<sup>3)</sup>、第二分に属する『増一経』『三聚経』及び第四分『世記経』(第四分はこの経典のみで構成される)の3経には対応するパーリ経典が現存しない。これが、『起世経』類仏典が、『長部』あるいは『長阿含経』の成立史や所属部派解明などの研究史上において注目されてきた理由のひとつである。

『起世経』類の最も古い異訳経典である『大樓炭経』の経名「樓炭」は「世界の生起」を意味するパーリ語「Lokopatti」・梵語「Lokadhātu」の音訳からとられたものである。また、他の経名『世記経』『起世経』からもうかがえるとおり、『起世経』類は、一言でいえば仏教的世界観・宇宙論を説いた経典であり、器世間すなわち衆生のすむ様々な世界の種類や様相、それらの生成流転から終末に至るまでの生滅が述べられている。仏教的世界観を説く仏典は他に『立世阿毘曇論』『正法念处経』などがあるが<sup>4)</sup>、これらは『起世経』類から発展した論書と考えられており、この種の仏典の原型としてもまた、『起世経』類は重要視されてきた。

上述のように、漢訳『起世経』類には四つの異訳が現存する。いずれも『大正新脩大藏経』巻1所載の題記にしたがえば、成立年代順に①西晋・法立共法炬訳『大樓炭経』六巻、②後秦・仏陀耶舎共竺仏念訳『長阿含第四分世記経』五巻、③隋・闍那崛多訳『起世経』十巻、④隋・達摩笈多訳『起世因本経』十巻である。後に詳しく述べるが、これらの経典はそれぞれ内容構成や巻数・訳文に差があり、比較検討が可能で有効な異訳経典類と見做されてきた。しかし、その目的は主として漢訳『長阿含経』及び構成経典である『世記経』の所属部派や成立過程を明らかにすることにあった。このため、比較的原典が近いとされる①『大樓炭経』と②『世記経』に特に比重が置かれ、『長阿含経』訳出以後の隋代に訳出された③『起世経』や④『起世因本経』は内容的に整理され発展しているものの、比較対象としてはさほど注目されてこなかったといえる。さらに③『起世経』と④『起世因本経』はほぼ同時代に成立していることもあり、構成・訳文ともほとんど似通っていて同一原典から漢訳されたことは間違いないと考えられるが、類似点の多さから却って異訳経文比較の対象とならず、両経の関係性についてはこれまでほとんど言及されてこなかったといえる<sup>5)</sup>。

2) 長阿含経については以下を参照。丘山新他訳注『現代語訳「阿含経典」長阿含経』第一巻～第六巻、平河出版社、1995年-2005年、劉震「梵本<長阿含>概術」『西域研究』2001年第1期、93-107頁。なお漢訳『長阿含経』は法蔵部の所属とされるが、現存するパーリ語『長部』とは単純に比較できないことは注意を要する。

3) パーリ語『長部』には34経が収録されており、うち28経が漢訳『長阿含経』に対応する。前掲注2参照。

4) 北魏・般若流支訳『正法念处経』(『大正蔵』17巻所収) 陳・真諦訳『立世阿毘曇論』(『大正蔵』32巻所収)。なお、仏教的宇宙論を扱った関連典籍には漢訳仏典だけでなく、パーリ語論書『Lokapaññatti』やチベット訳論書『世間施設』などもある。

5) 例えば、『起世経』類の中心をなす『長阿含世記経』の成立過程について詳細に検討されたのが石川海静氏である。石川氏は「長阿含世記経の成立に就て」(『日本仏教学協会年報』第8号、1936年、156-199頁)において、『起世経』類の組織内容の比較、経録を用いた伝訳関係の決定、各部派や論書からの影響の考察等から、原始的な仏教的世界

しかし、『起世経』と『起世因本経』のように、同時代に訳出された、しかも原典を同じくする異訳経典が現存することはむしろ貴重であり、『長阿含経』における『世記経』の成立問題とは別に、訳経史研究の観点からも、二経の訳出の事情や似て非なる訳文・訳語について検討する必要があると考える。そこで本論では隋代に訳出された同本異訳経典である『起世経』と『起世因本経』とその訳者に関する問題について検討し、『起世経』類を用いた異訳経の比較研究に新たな側面を提示したい。

## 一、漢訳仏典における同本異訳経の出現と『起世経』類研究

仏教伝来ののち、後漢代より連綿と製作されてきた漢語翻訳による仏教経典、いわゆる漢訳仏典の総数は膨大な量にのぼるが、そのすべてがそれぞれ異なる経典というわけではなく、中には同一系統の原典から翻訳されたとおぼしき典籍群も少なくない。これら同本異訳の経典は古くから存在しており、現存最古の経典目録である南朝梁・僧祐撰『出三蔵記集』巻二所載の「異出経録」には、仏典翻訳の開始からおよそ300年を経たこの当時、既に『般若経』や『般泥洹経』に七つの「異出」があったことなどが記録されている<sup>6)</sup>。異訳経典類は、時代を下るごとに増加の一途をたどり、『出三蔵記集』以後の経録編集においても異訳経の整理と目録作成は必須となった。ひとつの仏典に対する翻訳が複数あり、流行に程度の差はあってもそれらが互いに排斥されず並行して保持伝承されてきたのは漢訳仏典の特徴である<sup>7)</sup>。

このように同本異訳経が多く作成されるに至った理由には、大きく分けてふたつの要因があった。ひとつは仏典の翻訳側の問題であり、ひとつは漢訳仏典の元となる原典の問題である。

仏典漢訳が始まった当初、翻訳を担ったのは主として西域からの来華僧であり、漢人の協力もあったが、何分前例のない作業であったため、完成した漢訳仏典に使用された訳語や訳文は不慣れで難解なものが多かった。加えて経年による中国語自身の変化もあり、初期漢訳仏典は後世の人々にとって読みづ

---

観が仏教教理の発展にしたがって次第に体系的に組織編纂され『起世経』類に結実した過程を検討された。また『長阿含世記経』の原典は『大樓炭経』の原典に比べて思想的に発展した経典であり、この2経が同一系統の原本の異訳とは見られないこと、『起世経』『起世因本経』の原典は『長阿含世記経』のそれよりさらに思想的発展段階にあるが同一系統上の原典と見られることにも言及されている。また、陳祥明氏は「略論異訳経在仏典校勘方面的作用——以〈紀世経〉及其異訳為例」（『泰山学院学报』第29卷第1期、2007年、75-79頁）で、異訳経を利用した漢訳仏典の校勘例として、『起世経』を中心に他の3経との訳文比較を行われた。陳氏は校勘対象を衍文・誤文・脱文の三ケースに分けて計30例を挙げ、相互比較して字句の異同を指摘された。

6) 梁・僧祐撰『出三蔵記集』巻二、新集異出経録第二（『大正新脩大蔵経』（以下、『大正蔵』）と略記）55巻、13頁下-14頁上）

例えば『般若経』の異訳として「支識出般若道行品經十卷・竺朱士行出放光經二十卷・竺法護更出小品經七卷・衛士度抄摩訶般若波羅蜜道行經二卷・曇摩婢出摩訶鉢羅若波羅蜜經五卷・鳩摩羅什出新大品二十四卷・小品七卷」の「右一經七人異出」があげられている。

また、『出三蔵記集』に先行する東晋・道安撰『綜理衆経目録』には、「先出之遺文」を収めた「古異経録」や、各地方に流行した仏典を集めた「涼土異経録」「閩中異経録」などがあった。（いずれも『出三蔵記集』巻三所引、『大正蔵』55巻、15頁中～）

7) 例えばチベット語仏典では一経に対して一翻訳のみが伝えられた。沖本克己「経録と偽経」（『新アジア仏教史』第6巻、佼成出版社、2010年12月、284-319頁）参照。

らく理解され難いものであった。漢人で初めての西域求法者とされる三国魏の朱士行は、後漢の靈帝の頃に竺仏朔が訳した小品般若経の旧本である『道行経』の、文章が難渋で内容が不完全であることを嘆き、改めて般若経のテキストを求めて西域に行き、于闐において梵語の正本九十章を得た<sup>8)</sup>。それまでの古訳と呼ばれる初期仏典から一線を画し、旧訳の時代を開いた後秦の鳩摩羅什の伝には次のような記述がある。

大法の東して漢明に始めらるより、魏晉に涉歴して経論漸く多し。而るに支(謙)・竺(法護)の出だす所は滞文・格義多し。(中略) 既にして旧経を覽るに、義に紕僻多きは、皆な先度の旨を失い梵本と相応せざるに由る。(中略) 什、梵本を持して〔姚〕興、旧経を執りて以て相讎校す。其の新文、旧に異なるもの義は皆な円通し、衆心懐伏して欣讚せざるなし<sup>9)</sup>。

仏教及び仏典受容の深化につれて、古い漢訳仏典に対してより分かりやすい新しい翻訳の製作が求められ、羅什の時代にはまた様々な面で翻訳の環境が整いそれが可能となっていたのである。

また、僧祐は『出三蔵記集』『異出経録』の編纂に際し、冒頭で以下のように述べている。

異出経とは、胡本同じうして漢文異なるを謂うなり。梵書は復隱なりて宣訳変ずること多く、出経の士は才趣各おの殊なる。辞に質文有り、意或いは詳略あり。故に本の一なるをして末に二ならしめ、新旧をして参差あらしむ。国言の訛転して、則ち音字は楚・夏、訳辞の格礙は、則ち事義の胡・越なるが若し。豈に西伝の駿にして、乃ち東写の乖謬なるのみならんや<sup>10)</sup>。

漢訳仏典がその翻訳者や時代によって、文章に特徴——意味の伝達を重んじるか文章の美しさを重んじるか、原意を詳細に述べるか簡明に述べるか——が出るのは当然であるが、翻訳元となる梵語仏典がテキスト或いは口授の形で伝達される際、既に「宣訳変ずること多く」、これも新旧の異訳經典に相違の出る一因とされている。仏典漢訳が行われていた時代、インドでも並行して新たな仏典や論書が續々と成立し、西域あるいは南方経由で中国に伝えられ漢訳化されていった。全く新しい仏典が出るばかりでは

8) 梁・慧皎撰『高僧伝』卷四、義解一、朱士行伝(『大正蔵』50巻、346頁中)

「昔漢靈之時竺佛朔譯出道行經。即小品之舊本也。文句簡略意義未周。士行嘗於洛陽講道行經。覺文章隱質諸未盡善。每歎曰。此經大乘之要。而譯理不盡。誓志捐身遠求大本。遂以魏甘露五年發迹雍州。西渡流沙既至于闐。果得梵書正本凡九十章」

なおこの時朱士行が于闐で手に入れた「梵書」はのち中国に送られ、無羅叉・竺叔蘭により『放光般若経』として訳出された。前掲注(6)に引いた『般若経』の異訳「支讖出般若道行品經十卷・竺朱士行出放光經二十卷」はこの二経のことである。吉川忠夫・船山徹訳注『高僧伝(二)』(岩波文庫、2009年)参照。

9) 『高僧伝』卷二、訳経中、鳩摩羅什伝(『大正蔵』50巻、332頁上-中)

「自大法東被始于漢明。涉歴魏晉經論漸多。而支竺所出多滞文格義。興少達崇三寶銳志講集。什既至止。仍請入西明閣及逍遙園譯出衆經。什既率多諳誦無不究盡。轉能漢言音譯流便。既覽舊經義多紕僻。皆由先度失旨不與梵本相應。於是興使沙門僧碧僧遷法欽道流道恒道標僧叡僧肇等八百餘人諮受什旨。更令出大品。什持梵本與執舊經以相讎校。其新文異舊者義皆圓通。衆心懐伏莫不欣讚」

10) 『出三蔵記集』、新集異出経録第二(『大正蔵』55巻、13頁下)

「異出經者。謂胡本同而漢文異也。梵書復隱宣譯多變。出經之士才趣各殊。辭有質文意或詳略。故令本一末二新舊參差。若國言訛轉。則音字楚夏。譯辭格礙則事義胡越。豈西傳之駿。乃東寫之乖謬耳。是以泥洹楞嚴重出。至七般若之經。別本遇八。傍及衆典往往如茲。今竝條目列人以表同異。其異出雜經失譯名者。皆附失源之録」(下線は引用部分)

なく、旧来の仏典も、増補版のようにして内容や構成が漸次整理増幅されて伝えられてきた<sup>11)</sup>。そうなる  
と必然的に漢訳のやり直しが求められる。このように多くの異訳経典が作られた理由は必ずしも旧翻訳  
の訂正・改善だけではなく、原典自体の変化にもあったのであり、実際に同系統の異訳経典類を比較す  
ると、後に成立したものほど巻数・品数が多くなる傾向があった。

先に述べたように、多くの異訳経の存在は漢訳仏典の特徴ともいえ、訳経史研究の場において注目・  
活用されてきた<sup>12)</sup>。「異訳経の研究」は、特定の経典が時代や訳者を違えて2回以上翻訳されている場合  
に、相違点や変遷とりわけ時代別訳経の特徴を明らかにするために比較研究をおこなうものである。漢  
文の異訳経同士の比較研究は、仏典のより高次な理解を目指して古くは道安の時代からすでにおこなわ  
れ、異訳経の対照本も作られた<sup>13)</sup>。また漢訳の異訳経類との比較対象のみならず、サンスクリット原典あ  
るいはチベット語訳仏典がある場合これらとの比較対象研究も盛んにおこなわれているが、『起世経』類  
の場合相応する原典がないため、漢訳異訳経間の比較が主となってきた<sup>14)</sup>。次節ではまず、『起世経』類  
を用いた先行研究の成果を踏まえながら、四つの異訳、特に訳出年代が近く内容の類似性から従来注目  
されてこなかった『起世経』と『起世因本経』について歴代経録の記録と訳文の比較を通して問題点を  
考察したい。

## 二、経録から見た『起世経』類異訳経典

梁・僧祐の『出三蔵記集』には、『楼炭経』<sup>15)</sup>及び『長阿含経』についての記載がある。まず巻第二の  
「新集経論録」には闕本であるが西晋・竺法護の訳出経として「楼炭経五卷：安公云出方等部」<sup>16)</sup>があり、  
また西晋・法炬訳の「楼炭経六卷：別録所載安録先闕」<sup>17)</sup>が載せられている。同巻二、「新集異出経録」  
にも「楼炭経：竺法護出楼炭五卷、釈法炬出楼炭六卷。右一経。二人異出」<sup>18)</sup>とし、『楼炭経』の竺法護  
訳と法炬訳の二異訳経があげられている。しかし時代が下ると、隋・費長房撰『歴代三宝紀』巻六や唐・  
道宣撰『大唐内典録』には竺法護訳の五巻本、法立と法炬訳の六巻本、法炬訳の八巻本の三本があげら

11) 岡部和雄「訳経史研究の方法と課題（一）——付・『四十二章経』の成立と展開——」（『三蔵』62、1972年、193-205頁）、195頁参照。

「しかし同本異訳とされていても、厳密にはそれらが基づいたインド、西域の原典の時代的、地域的变化をも考慮に  
入れる必要があるから、訳語などの相違をストレートに訳者および訳者の時代に帰することは危険であろう」

12) 岡部和雄前掲注（11）論文参照。

13) 例えば東晋の支敏度は、当時すでに支謙訳・竺法護訳・竺叔蘭訳と三本あった維摩経について、支謙訳を底本とし  
た対照本『合維摩詰経』を作った。東晋代には他にも道安や支道林などが異訳経の対比研究をおこなっている。横  
超慧日「中国仏教初期の翻訳論」（『中国仏教の研究一』法蔵館、1976年、219-255頁）224-227頁参照。

14) しかし、『起世経』類の構成要素自体はパーリ語・漢訳『阿含経』やその他諸経典に断片的に表れており、『長阿含  
世記経』の成立過程を考える上で格好の資料となっている。石川海浄氏前掲論文参照。

15) 『大正蔵』では経題を『大樓炭経』と称するが、ここでは『出三蔵記集』の記載にしたがう。

16) 『出三蔵記集』巻二、新集経論録第一（『大正蔵』55巻、8頁下）

17) 『出三蔵記集』巻二、新集経論録第一（『大正蔵』55巻、9頁下）

18) 『出三蔵記集』巻二、新集異出経録第二（『大正蔵』55巻、14頁中）

れ<sup>19)</sup>、唐・智昇撰『開元釈経録』に受け継がれた<sup>20)</sup>。このうち現存するのは一本で、西晋・法立共法炬訳『大樓炭経』六巻のみである。

『世記経』が含まれる『長阿含経』についても、『出三蔵記集』に記録されている。仏馱耶舎の訳出経典として「長阿含経二十二卷：秦弘始十五年（413）出竺仏念伝訳」があり<sup>21)</sup>、後の経録は『長阿含経』を仏馱耶舎と竺仏念の共訳として伝える。異訳について、『出三蔵記集』の「新集異出経録」には仏馱耶舎の『長阿含経』と法顕の『長阿含経』の二つがあったとする<sup>22)</sup>。その他、「新集統撰失訳雑経録」には、当時既に欠本となっていたが、残欠経と思われる三巻本の『長阿含経』や、『長阿含方法経』などの名もみえる<sup>23)</sup>。また、僧祐は自身の手になる「世界記目録序」を『出三蔵記集』巻十二、雑録に採録している。「世界記」は現存しないが、目録と序文を見る限り僧祐が各教典から仏教的世界観に関わる箇所を抜き出して編集したものと思われる。各記には出典が明記してあり、『長阿含経』特に記題から見て『世記経』からの引用がほとんどを占めているが、『樓炭経』からの引用も一部あった<sup>24)</sup>。

これについて、僧祐は「世界記目録序」に次のように述べている。

竊かに惟うに、方等の大典は深空を説くこと多し。唯だ長鎗・樓炭のみ世界を弁章す。而るに文博く偈広くして卒かに検究し難し。且つ名師法匠は職として玄義を競い、事源委積して未だ必ずしも曲尽せず。祐、庸固を以て志は拾遺に在り。故に両経を抄集して以て根本を立て、兼ねて雑典を附

19) 隋・費長房撰『歴代三宝紀』巻六（『大正蔵』49巻、62頁上-66頁下）

〔竺法護訳〕樓炭経五巻 或六巻八巻是長阿含世記句文小異見聶道真録。道安云。出方等部。…（法立共法炬訳）樓炭経六巻 第二出。見別録與法護出五巻者小異。出長阿含。安録無。…（法炬訳）第三出。是長阿含世記一分。與法護法立所出五巻六巻者大同略廣異。先共法立出。以意未悉故廣之。見支敏度及寶唱録〕

唐・道宣撰『大唐内典録』にもほぼ同様の記述がある（『大正蔵』55巻、233頁上-237頁下）。

20) 唐・智昇撰『開元釈経録』（『大正蔵』55巻、496頁上-499頁下）

また『樓炭経』との関連は不明であるが、各経録には『観世樓炭経』や『小樓炭経』の名も見える。ただし経名のみで現存しない。

21) 『出三蔵記集』巻二、新集経論録第一（『大正蔵』55巻、11頁中）

22) 『出三蔵記集』巻二、新集異出経録第二（『大正蔵』55巻、15頁上）

23) 『出三蔵記集』巻四、新集統撰失訳雑経録（『大正蔵』55巻、32頁上・36頁上）

24) 『出三蔵記集』巻十二、雑録、僧祐撰世界記目録序第五（『大正蔵』55巻、88頁上-下）

この目録によれば、『世界記』は以下の五巻二十記より構成されていた。『長阿鎗』 = 『長阿含経』である。

「第一巻：三千大千世界名數記第一 出長阿鎗／諸世界海形體記第二 出華嚴経／大小劫名譬喩記第三 出樓炭経／劫初世界始成記第四 出長阿鎗／大海須彌日月記第五 出長阿鎗／四天下地形人物記第六 出長阿鎗／劫初四姓種縁記第七 出長阿鎗〕

「第二巻：轉輪聖王記第八 出長阿鎗／欲界六天記第九 出長阿鎗／色界二十二天記第十 出長阿鎗／無色界四天記第十一 出長阿鎗／乾闥婆那羅記第十二 出長阿鎗〕

「第三巻：阿須輪鬪戰記第十三 出長阿鎗／世界諸神及餓鬼記第十四 出長阿鎗／龍金翅象師子十二獸記第十五 出大集経〕

「第四巻：大小地獄閻羅官屬記第十六 出長阿鎗〕

「第五巻：世界雲雷雨電記第十七 出長阿鎗／世界樹王華藥記第十八 出長阿鎗／小劫飢兵疫三災記第十九 出長阿鎗／大劫火水風三災記第二十 出長阿鎗〕

して互いに同異を出だし、撰じて五巻と為す<sup>25)</sup>。

僧祐は『長阿含世記経』と『楼炭経』のみが仏教的世界観を述べた経典であるとして、この両経を中心として『世界記』を編纂した。僧祐は「新集異出経録」では、『長阿含世記経』と『楼炭経』を同一の異出経とはしていないが、二経の類似性や内容の特殊性を認識していたようである。隋・法経撰『衆経目録』に至って、『長阿含世記経』と『楼炭経』は明確に同本異訳経典と見做されるようになった。『衆経目録』巻三、衆経異訳二には、

楼炭経六巻、是れ世記経なり、晋の世の沙門法炬、法立と共に訳す。

楼炭経五巻、亦た是れ世記経なり、晋の世の竺法護訳す<sup>26)</sup>。

とあり、『楼炭経』すなわち『世記経』であるという。

さて、隋代に訳出された『起世経』『起世因本経』の名称が経録上に現れるのは、唐代に入ってからである。しかしながら唐・道宣撰『大唐内典録』巻七には『起世因本経』について、「十巻一百五十五紙、一に起世経と云う、隋大業年に達摩笈多が東都上林園において訳す」と言うのみで<sup>27)</sup>、隋・闍那崛多訳『起世経』には言及していない。また唐・明佺等撰『大周刊定衆経目録』も『大唐内典録』をそのまま踏襲し、『起世因本経』のみを記載している<sup>28)</sup>。『起世経』が登場するのは唐・智昇撰『開元釈教録』まで俟たねばならない。

（闍那崛多訳）起世経十巻、第五訳なり。是れ長阿含記世経の異出なり、経題上に見るに崛多・笈多の二法師共に出だし、新たに編入すと云う<sup>29)</sup>。

（達摩笈多訳）起世因本経十巻、第六出、長阿含第四分記世経及び楼炭経等と同本なり、亦た直だ起世経と云いう、内典録に見ゆ<sup>30)</sup>。

文中、「五訳」「六出」とあるのは訳出の順序である。『開元釈教録』において示された『起世経』類異訳経典は、現存しないものも含め①西晋・竺法護訳『楼炭経』、②西晋・法炬共法立訳『(大)楼炭経』、③西晋・法炬訳『楼炭経』、④後秦・仏陀耶舎共竺仏念訳『長阿含第四分世記経』、⑤隋・闍那崛多訳『起世経』、⑥隋・達摩笈多訳『起世因本経』の六本であった。

25) 『出三蔵記集』巻十二、雑録、僧祐撰世界記目録序第五（『大正蔵』55巻、88頁中）

「竊惟方等大典多説深空。唯長鎗樓炭辯章世界。而文博偈廣難卒檢究。且名師法匠職競玄義。事源委積未必曲盡。祐以庸固志在拾遺。故抄集兩經以立根本。兼附雜典互出同異。撰爲五巻」

26) 隋・法経撰『衆経目録』巻三、衆経異訳二（『大正蔵』55巻、130頁上）

「楼炭経六巻、是世記経、晋世沙門法炬共法立譯／楼炭経五巻、亦是世記経、晋世竺法護譯」

27) 『大唐内典録』巻七、歴代小乗蔵経翻本単重伝訳有無録第三（『大正蔵』55巻、298頁中）

28) 唐・明佺等撰『大周刊定衆経目録』巻十四、見定流行入蔵録下、重訳経（『大正蔵』55巻、413頁下）

「起世因本経一部十巻、一云起世経、一百六十五紙。右隋大業年達摩笈多於東都譯。出長房録」

「長房録に出づ」とあるが、隋・費長房撰『歴代三寶紀』には該当の記事はなく、『大唐内典録』の誤りであると思われる。

29) 唐・智昇撰『開元釈教録』巻七、総括群経録（『大正蔵』55巻、549頁上）

「起世経十巻、第五譯、是長阿含記世経異出見経題上云崛多笈多二法師共出新編入」

30) 『開元釈教録』巻七、総括群経録（『大正蔵』55巻、551頁下）

「起世因本経十巻、第六出、與長阿含第四分記世経及楼炭経等同本亦直云起世経見内典録」

以上に見てきたように、『起世経』類異訳経典は現存する四種以外にもさらにいくつか作られていたようであるが、『楼炭経』に関しては一経しか残らないため深く考察することはできない。翻って『起世経』と『起世因本経』についていえば、経録に採録される時期に違いがあり、『大唐内典録』などには『起世因本経』一経のみが数えられ、また『起世因本経』がすなわち『起世経』とも称されたとしている。これは名称がほぼ同じ二経が混同されたためとも考えられるが、或いは何らかの理由で『起世因本経』が先に流布し、『起世経』は遅れて知られるようになったとも考えられる。

そこで次節では、隋代に活躍した二人の訳経僧、『起世経』と『起世因本経』の訳者である闍那崛多と達摩笈多の行跡と、二経の訳出にかかる事情を考察したい。

### 三、隋の訳場における闍那崛多と達摩笈多

闍那崛多と達摩笈多の伝はいずれも、唐・道宣撰『統高僧伝』『大唐内典録』、唐・智昇撰『開元釈教録』などにみえるが、長文なので概要を簡略にまとめる。

闍那崛多。隋言徳志北賢豆。賢豆、本音因陀羅婆陀那。此云主處。謂天帝所護故也。賢豆之音。彼國之訛略耳。身毒天竺。此方之訛稱也。而彼國人。總言賢豆而已。乃之以爲五方也。撻陀囉國人也。…時年二十有七。受戒三夏。師徒結志遊方弘法。初有十人。同契出境。…又達吐谷渾國。便至鄯州。于時即西魏大統元年也。雖歷艱危心逾猛勳。發蹤跋涉三載于茲。十人之中過半亡沒。所餘四人僅存至此。以周明帝武成年。初屆長安。止草堂寺。…以武平六年相結同行採經西域。往返七載將事東歸。凡獲梵本二百六十部。…大隋受禪佛法即興。…即與使乎同來入國。于時文帝巡幸洛陽。於彼奉謁。天子大悅賜問頻仍。未還京闕尋勅敷譯。新至梵本衆部彌多。或經或書。且内且外。諸有翻傳必以崛多爲主。僉以崛多言識異方字曉殊俗。故得宣辯自運。不勞傳度。理會義門句圓詞體。文意粗定銓本便成。筆受之徒不費其力<sup>31)</sup>

闍那崛多 jñānaguputa (漢訳は徳志) は北インドのガンダーラ国の出身で、27歳の時10人の仲間とともに弘法の旅に出た。西行して諸国を巡り吐谷渾に達し、西魏の) 鄯州に到達した。北周明帝治下の長安草堂寺に止住したが、のち北周の廢仏に遭遇し、再び西域へ往来し多数の梵本を得た。隋が興り仏教が復興されると、中国に戻り大興善寺で訳経の任にあたった。当時、将来された多くの梵本が次々と翻訳されたが、必ず闍那崛多がその訳主となった。闍那崛多は多くの言葉を知っていたので自らよく翻訳をおこない、伝語や筆受などの作業分担者に苦勞させなかったという。

達摩笈多。隋言法密。本南賢豆羅囉國人也。刹帝利種。姓弊耶伽囉。此云虎氏。…遂達于瓜州。方知委曲取北路之道也。笈多遠慕大國跋涉積年。初契同徒或留或歿。獨顧單影屆斯勝地。靜言思之悲喜交集。尋蒙帝旨。延入京城。處之名寺供給豐渥。即開皇十年冬十月也。至止未淹。華言略悉。又奉別勅令就翻經。移住興善執本對譯。允正寔繁。所誦大小乘論並是深要。至於宣解大弘微旨<sup>32)</sup>

31) 唐・道宣撰『統高僧伝』卷二、訳経篇二、隋西京大興善寺北賢豆沙門闍那崛多伝(『大正蔵』卷50、433頁中-434頁下)

32) 『統高僧伝』卷二、訳経篇二、隋東都雒陽上林園翻経館南賢豆沙門達摩笈多伝(『大正蔵』卷50、434頁下-436頁中)



一方、達摩笈多 Dharmagupta（法密、？-619）は南インドの出身で、出家の後仏教研究をしながら西域諸国を巡り、隋の開皇十年（590）長安に入った。ほどなくして中国語に通じ、勅を受けて大興善寺で訳経に従事することとなった。受持していた大小乗の論はいずれも深い道理を含んだものであり、その微妙な趣旨をあますところなく訳して述べ伝えたのである。

隋文帝の開皇十年頃から仁寿年間（601-604）にかけて、闍那崛多と達摩笈多はともに長安の大興善寺で訳経事業に携わっていた<sup>33)</sup>。当時の訳場の最高責任者、訳主は闍那崛多であり、達摩笈多はその参画者、補佐役であったと思われる。

しかし、仁寿の末年に、闍那崛多は排斥されて東越すなわち閩の地に追われ、かれに代わって達摩笈多が伝訳の事業を掌ることとなった。『開元釈教録』巻七、総括群経録に、

仁壽之末、崛多以縁他事流擯東越。笈多乘機專主傳譯。從大業初年終大業末歲。譯大方等善注意等經九部。並文義澄潔華質顯暢<sup>34)</sup>。

とある通りである。ただし闍那崛多排斥の年代には若干問題があり、『統高僧伝』の伝では闍那崛多は開皇二十年（600）に78歳で死去したとされる<sup>35)</sup>が、同じ道宣の撰になる『大唐内典録』では仁寿の末年に排斥されたとしており、『開元釈教録』の選者智昇も疑義を呈している<sup>36)</sup>。なお「他事に縁る」とは、『統高僧伝』によれば「隋の滕王、戒範を遵仰し、奉じて以て師と為す。事に因りて塵染され東越に流擯せらる」とある。或いは闍那崛多の排斥は隋文帝の同母弟であり、後に文帝と不仲となり若くして急死したことが皇帝による毒殺ではないかと噂された、滕王瓚<sup>37)</sup>の尊崇を受けていたことに関係するようである。滕王瓚は隋建国後、いちど事に連坐して雍州牧を辞し、栗園で急死したのが開皇十一年（591）であるから、かれに絡んで排斥がおこなわれたとすれば、『大唐内典録』や『開元釈教録』のいう仁寿末年（604）頃は少し遅いかもしれない。しかし、達摩笈多は開皇十年（590）に長安に入ったのであり、そこから闍那崛多の訳場に参加し後に訳主となるまではある程度の期間が必要であったはずで、滕王瓚の死去した開皇十一年以後、すぐに闍那崛多が訳場を去ったとも考えにくい。闍那崛多排斥の年代については今後さらに考察を要する問題である。

ともあれ訳場の主催者となった達摩笈多は、のち煬帝が洛水上林園に建てた翻経館に移り、大業の末年（616）に至るまで数々の訳経をおこなった<sup>38)</sup>。

33) 例えば、後秦・鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』の異訳にあたる『添品妙法蓮華経』（『大正蔵』巻9）は闍那崛多と達摩笈多の共訳と伝えられる。

34) 『開元釈教録』巻七、総括群経録（『大正蔵』55巻、552頁中）

35) 『統高僧伝』巻二、闍那崛多伝

「…隋滕王遵仰戒範。奉以爲師。因事塵染流擯東越。又在甌閩道聲載路身心兩救爲益極多。至開皇二十年。便從物故。春秋七十有八。自從西服來至東華。循歷翻譯合三十七部。一百七十六卷」

36) 『開元釈教録』巻七、総括群経録（『大正蔵』55巻、552頁中）

「又内典録云、仁壽之末崛多以縁他事流擯東越。續高僧傳即云、開皇二十年卒傳録俱宣所撰而自相矛盾何也」

37) 『隋書』巻四十四、滕穆王瓚伝

38) 『統高僧伝』巻二、達摩笈多伝

「…煬帝定鼎東都。敬重隆厚。至於佛法彌增崇樹。乃下勅於洛水南濱上林園内。置翻経館。搜擧翹秀。永鎮傳法。登即下徵笈多并諸學士。並預集焉。…始於開皇中歲。終於大業末年二十八載。所翻経論七部。合三十二卷。即起世縁

この二人の事跡と、『起世経』『起世因本経』の成立過程を考えると、およそ以下のように推定される。まず『起世経』『起世因本経』の翻訳元となった原典についてであるが、闍那崛多が北周の廢仏により一度中国を離れ西域へ行った際に入手した梵本260部の中に或いは含まれていたのかもしれない。『開元釈教録』に言うとおりに、『起世経』が闍那崛多・達摩笈多の共訳であるかは分からないが<sup>39)</sup>、少なくとも闍那崛多が訳主を務めている期間に行われたのは確かだろう。闍那崛多が排斥されたのち、達摩笈多が新たに訳主となり、同一原典を用いて改めて『起世因本経』を訳出したのではないか。その理由は不明であるが、実際に両経の訳文を比較してみると意味はほぼ変わらないものの音訳語などについてはかなり置き換えられている語彙も多く<sup>40)</sup>、互いに似て非なる漢訳がなされている。恐らく先の『起世経』を参考にしつつ、達摩笈多自身にとってより良い『起世因本経』が翻訳されたのであろう。後発の『起世因本経』の方が先に流布し、経録における『起世経』の記載が遅れたのも、訳主である闍那崛多の排斥が影響したためではないかと考えられる。

### おわりに

本論では隋代の同本異訳経『起世経』『起世因本経』の成立過程について考察を行った。この二経はさらに『大樓炭経』『長阿含世記経』とも異訳の関係にあるところから比較研究の対象として用いられていたが、『起世経』『起世因本経』自身の成立や両者の関係については明らかにされていなかったためである。今回は経録や訳者の伝を用いて、時代的にも内容的にも非常に類似した二経の出現に、訳者自身やかれらを取り巻く状況の変化が影響を与えた可能性を指摘したが、単に異訳経同士を比較するだけでなく、このように周辺史料を用いた外部からのアプローチも異訳経をめぐる問題の考察に有効であると考える。なお、付表として【『起世経』類異訳経典巻品対照表】【『起世経』『起世因本経』巻一冒頭訳文比較表】をつけた。改めて両経の訳文の比較検討を行いつつ、『起世経』類経典の他の文献への引用例の収集や分析を、今後の課題としたい。

生薬師本願攝大乘菩提資糧等是也。並文義澄潔華質顯暢。具唐貞觀內典錄。至武德二年終于洛汭」

なお、隋末の仏教界を巡る状況については伊藤誠浩「隋末の洛陽仏教と政情——隋皇泰主をめぐる——」（『東海佛教』第43輯、1998年、34-49頁）参照。

39) 前掲注(29)参照。

40) 本稿末尾【付表2】参照。

【付表1：『起世経』類異訳経典巻品対照表】

最も古い形である『大樓炭経』のみ十三品あり、その「高善士品第七」は他の異訳経には見られない。他の諸品については、若干の順序の異動、例えば『大樓炭経』の阿須倫品第五・龍鳥品第六が『長阿含世記経』以降、龍鳥品第五・阿須倫品第六の順になる等があるものの、大きな変化はない。なお各品の内容の詳細については石川海浄「長阿含世記経の成立に就て」（『日本仏教学協会年報』第8号、1936年、156-199頁）参照。

『大樓炭経』	『長阿含世記経』	『起世経』	『起世因本経』
閻浮利品第一	閻浮提州品第一	閻浮洲品第一	閻浮洲品第一
鬱單曰品第二	鬱單曰品第二	鬱單越洲品第二	鬱多羅究留洲品第二
轉輪王品第三	轉輪聖王品第三	轉輪聖王品第三	轉輪王品第三
泥犁品第四	地獄品第四	地獄品第四	地獄品第四
阿須倫品第五	龍鳥品第五	諸龍金翅鳥品第五	諸龍金翅鳥品第五
龍鳥品第六	阿須倫品第六	阿修羅品第六	阿修羅品第六
高善士品第七			
四天王品第八	四天王品第七	四天王品第七	四天王品第七
忉利天品第九	忉利天品第八	三十三天品第八	三十三天品第八
戰鬪品第十	三災品第九	鬪戰品第九	鬪戰品第九
三小劫品第十一	戰鬪品第十	劫住品第十	劫住品第十
災變品第十二	三中劫品第十一	世住品第十一	世住品第十一
天地成品第十三	世本縁品第十二	最勝品第十二	最勝品第十二

【付表2：『起世経』『起世因本経』巻一冒頭訳文比較表】

『大正新脩大藏経』第一巻所収、『起世経』巻第一及び『起世因本経』巻第一をそれぞれ底本とした。「内容」は筆者が便宜上つけたものである。なお【 】内は割注である。

内 容	『起世経』	『起世因本経』
表 題	起世経巻第一 隋天竺三藏闍那崛多等譯 閻浮洲品第一	起世因本経巻第一 隋天竺沙門達摩笈多譯 閻浮洲品第一
発 端	如是我聞。一時婆伽婆在舍婆提城迦利羅石室。 時諸比丘。食後皆集常說法堂。一時坐已。各各生念。便共議言。 是諸長老。未曾有也。今此世間。衆生所居國土天地。云何成立。云何散壞。云何壞已而復成立。云何立已而得安住 爾時世尊獨在靜室。天耳徹聽。清淨過人。聞諸比丘食後皆集常說法堂共作如是希有言論。 世尊聞已。晡時出禪。從石室起。往法堂上。在諸比丘大衆之前。依常敷座。儼然端坐。 於是世尊知而故問。汝等比丘。於此集坐。向來議論有何所說。 時諸比丘同白佛言。大德世尊。我等比丘。於此法堂。食後共集。大衆詳議作如是言。是諸長老。未曾有也。云何世間如是成立。云何世間如是散壞。云何世間壞已復立。云何世間立已安住。大德世尊。我等向來集坐言論。正議斯事	如是我聞。一時婆伽婆。在舍囉婆悉帝城迦利囉窟。 爾時。彼處衆多比丘。飯食已皆出來集迦利囉堂。一時坐已。各生是念。同共議言。 諸長老輩。未曾有也。今此世間。天地衆生。所居國土。云何轉合。云何轉散。云何轉散已而復還合。云何轉合已而安住也。 是時世尊。獨在靜窟。天耳徹聽清淨過人。聞諸比丘飯食已後。皆出聚集迦利囉堂。共作如是希有語言。 世尊聞已。其日晡時出於禪定。從迦利囉窟中而起。行詣堂上。到堂上已。在諸比丘大衆之前。依常敷座。儼然端坐。 世尊坐已。知而故問。汝等比丘。向者議論說何語言。聚集而坐。 時諸比丘。同白佛言。大德世尊。我等食後。諸比丘衆。皆共至此迦利囉堂。集聚詳議如是語言。『諸長老輩甚奇希有。云何世間如是轉合。云何世間如是轉散。云何世間轉散已合。云何世間轉合已住』。大德世尊。我等向者有是語言。是以集議斯事

	爾時佛告諸比丘言。善哉善哉。汝諸比丘。乃能如是。如法信行。諸善男子。汝以信故。捨家出家。汝等若能共集一處。作如是等如法語者。不可思議。	爾時佛告諸比丘言。善哉善哉。諸比丘輩。汝等能爾如法信行。諸善家子。汝以信故捨家出家。若汝等輩。能作如是如法語言。共集坐者不可思議。
二種法行	汝等比丘。若集坐時。應當修此二種法行。各為己業。不生怠慢。所謂論說法義。及聖默然。若能爾者。汝等當聽如來所說如是之義。世間成立世間散壞世間壞已而復成立。世間立已而得安住。	汝等比丘集坐時。應修如是二種法行。各作事業。若論法義。若聖默然。不生怠慢。若能爾者。汝等當聽如來所說如是之義。世間轉合。世間轉散。世間轉散已而復還合。世間轉合已而安住。
	時諸比丘同白佛言。大德世尊。今正是時。修伽多。今正是時。若佛世尊。為諸比丘說此義者。我諸比丘。聞世尊說。當如是持。	作是語已時。諸比丘同白佛言。大德世尊。此是時也。修伽多此是三摩耶。若佛世尊。為諸比丘說如此義。諸比丘聞世尊所說。當如是持。
	爾時佛告諸比丘言。汝等比丘。諦聽諦聽。善思念之。我當為汝次第演說。時諸比丘同白佛言。唯然世尊。願樂欲聞。	爾時佛告諸比丘言。汝等比丘。諦聽諦聽善思念之。我當為汝次第而說。時諸比丘同白佛言。唯然世尊。願樂欲聞。
三千世界	佛言。比丘。如一日月所行之處。照四天下。如是等類。四天世界。有千日月所照之處。此則名為一千世界。	爾時佛告諸比丘言。諸比丘。如一日月所行之處。照四天下。爾所四天下世界。有千日月。諸比丘。此則名為一千世界。
一千世界	諸比丘。千世界中。千月千日千須彌山王。四千小洲。四大洲。四千大海。四千龍種姓。四千大龍種姓。四千金翅鳥種姓。四千金翅鳥種姓。四千惡道處種姓。四千大惡道處種姓。四千小王。四大王。七千種種大樹。八千種種大山。十千種種大泥犁。千閻摩王。千閻浮洲。千瞿陀尼。千弗婆提。千鬱單越。千四天王天。千三十三天。千夜摩天。千兜率陀天。千化樂天。千他化自在天。千摩羅天。千梵世天。	諸比丘。千世界中。千月千日千須彌山王。四千小洲。四大洲。四千大海。四千龍種姓。四千大龍種姓。四千金翅鳥種姓。四千金翅鳥種姓。四千惡道處種姓。四千大惡道處種姓。四千小王。四大王。七千種種大樹。八千種種大山。十千種種大泥犁。千閻摩羅王。千閻浮洲。千瞿陀尼。千弗婆提。千鬱多囉究留。千四天王天。千三十三天。千夜摩天。千兜率陀天。千化樂天。千他化自在天。千諸摩囉天。千梵世天。
	諸比丘。於梵世中。有一梵王。威力最強。無能降伏。統攝千梵自在王領。云我能作能化能幻。云我如父。於諸事中。自作如是僑大語已。即生我慢。	諸比丘。彼梵世中有一梵主。威力最強無能降者。統攝千梵自在王領。云我能作能化能幻。云我如父於諸事中自作。如是僑大語言。即生我慢。
	如來不爾。所以者何。一切世間。各隨業力。現起成立。	如來不然。所以者何。一切世間各隨業力現成此世。
	諸比丘。此千世界。猶如周羅。【周羅者隋言髻】名小千世界。	諸比丘。如此小千世界。猶如周羅。【周羅者隋言髻也外國人頂上結少許長髮為髻】名千世界。
中千世界	諸比丘。爾所周羅一千世界。是名第二中千世界。	諸比丘。爾所周羅一千世界。是名第二中千世界。
三千世界	諸比丘。如此第二中千世界。以為一數。復滿千界。是名三千大千世界。	諸比丘。如一第二中千世界。爾所中千一千世界。是名三千大千世界。
	諸比丘。此三千大千世界。同時成立。同時成已而復散壞。同時壞已而復還立。同時立已而得安住。	諸比丘。此三千大千世界。一時轉合。一時轉合已而還復散。一時轉散已而復還合。一時轉合已而安住。
	如是世界。周遍燒已名為散壞。周遍起已。名為成立。周遍住已。名為安住。是為無畏一佛刹土衆生所居。	如是世界周匝轉燒。名為散壞。周匝轉合。名為成就。周匝轉住。名為安立。是為無畏一佛刹土衆生所居。
世界構造	諸比丘。今此大地。厚四十八萬由旬。周闊無量。如是大地。住於水上。水住風上。風依虛空。	諸比丘。此大地厚四十八萬由旬。邊廣無量。諸比丘。此之大地住於水上。水住風上。風依虛空。
	諸比丘。此大地下。所有水聚。厚六十萬由旬。周闊無量。彼水聚下。所有風聚。厚三十六萬由旬。周闊無量。	諸比丘。此大地下所有水聚。彼水聚厚六十萬由旬。邊廣無量。彼水聚下所有風聚。彼風聚厚三十六萬由旬。邊廣無量。
	諸比丘。此大海水。最極深處。深八萬四千由旬。周闊無量。	諸比丘。其大海水最甚深處。深八萬四千由旬。邊廣無量。
須彌山	諸比丘。須彌山王。下入海水。八萬四千由旬。上出海水。亦八萬四千由旬。	諸比丘。其須彌山王。入海水中八萬四千由旬。出海水上亦八萬四千由旬。
	須彌山王。其底平正。下根連住大金輪上。	諸比丘。須彌山王。其底平正。下根連住大金輪上。

	諸比丘。須彌山王。在大海中。下狹上闊。漸漸寬大。端直不曲。大身牢固。佳妙殊特。最勝可觀。四寶合成。所謂金銀琉璃頗梨。	諸比丘。其須彌山王。於大海中。下狹上廣。漸漸寬大。端直不曲。牢固大身。微妙最極。殊勝可觀。四寶合成。所謂金銀琉璃頗梨。
	須彌山上。生種種樹。其樹鬱茂。出種種香。其香遠熏。遍滿諸山。多衆聖賢。最大威德。勝妙天神之所止住。	生種種樹。其樹鬱茂。出種種香。其香遠熏。遍滿諸山。多衆聖賢。最大威德勝妙天神之所止住。
四方峰	諸比丘。須彌山王。上分有峰。四面挺出。曲臨海上。各高七百由旬。殊妙可愛。七寶合成。所謂金銀琉璃頗梨眞珠車漚瑪瑙之所莊校。	諸比丘。須彌山王。上分之中。四方有峯。其峯傍挺角出。各高七百由旬。微妙可憲。七寶所成。所謂金銀琉璃頗梨赤眞珠車漚馬瑙等之所莊嚴。曲臨海上。
三級	諸比丘。須彌山下。別有三級。諸神住處。	諸比丘。其須彌山下有三級。諸神住處。
下級	其最下級。縱廣正等。六十由旬。七重牆院。七重欄楯。七重鈴網。復有七重多羅行樹。周匝圍遶。端嚴可愛。其樹皆以金銀琉璃頗梨赤眞珠車漚瑪瑙七寶所成。	其最下級。縱廣六十由旬。七重牆壁。七重欄楯。七重鈴網。復有七重多羅行樹。周匝圍遶。可憲端正。其樹皆以金銀琉璃頗梨赤眞珠車漚馬瑙等七寶所成。
	一一牆院。各有四門。於一一門。有諸壘堞重閣輦軒却敵樓檣臺殿房廊園池沼。	其諸牆壁各有四門。彼一一門有諸壘堞。具足莊嚴。重閣輦軒却敵樓檣臺殿房廊。樹林苑等。
	一一池中。竝出妙華。散衆香氣。有諸樹林。種種莖葉。種種花果悉皆具足。亦出種種殊妙香氣。	并諸池沼。池出妙華衆雜香氣。有種種樹種種莖葉種種華果。悉皆具足。亦出種種微妙諸香。
	復有諸鳥。各出妙音。鳴聲間雜。和雅清暢。	復有諸鳥。各出妙音。鳴聲間雜。和雅清徹。
中級	其第二級。縱廣正等。四十由旬。七重牆院。七重欄楯。七重鈴網。多羅行樹亦有七重。周匝齊平。端嚴可愛。亦爲七寶。金銀琉璃頗梨赤眞珠車漚瑪瑙之所校飾。所有莊嚴。門觀樓閣臺殿園池果樹衆鳥。皆悉具足。	其中分級。縱廣四十由旬。所有莊嚴七重牆壁。欄楯鈴網。多羅行樹。可憲齊平。周匝端正。亦爲七寶金銀琉璃頗梨赤眞珠車漚馬瑙等之所校飾。門觀樓閣臺殿。園池果樹及以衆鳥。皆悉具足。
上級	其最上級。縱廣正等。二十由旬。七重牆院。乃至諸鳥。各出妙音。莫不具足。	其上分級。縱廣二十由旬。七重牆壁。乃至諸鳥。各出妙音。
三級住人	諸比丘。於下級中。有夜叉住。名曰鉢手。第二級中。有夜叉住。名曰持鬘。於上級中。有夜叉住。名曰常醉。	諸比丘。其下級中。有夜叉住。名曰鉢手。其中級中。有諸夜叉。名曰持鬘。其上級中。有諸夜叉。名曰常醉。
四天空殿	諸比丘。須彌山半。高四萬二千由旬。有四大天王所居宮殿。	諸比丘。須彌山半。四萬二千由旬中。有四大天王宮殿。
諸天	須彌山上。有三十三天宮殿。帝釋所居。	諸比丘。須彌山上。有三十三諸天宮殿。帝釋所住。
	三十三天已上一倍。有夜摩諸天所居宮殿。	三十三天。向上一倍。有夜摩諸天宮殿住。
	夜摩天上。又更一倍。有兜率陀天所居宮殿。	其夜摩天。向上一倍。有兜率陀諸天宮殿住。
	兜率天上。又更一倍。有化樂諸天所居宮殿。	其兜率天。向上一倍。有化樂諸天宮殿住。
	化樂天上。又更一倍。有他化自在諸天宮殿。	其化樂天。向上一倍。有他化自在諸天宮殿住。
	他化天上。又更一倍。有梵身諸天所居宮殿。	其他化自在天。向上一倍。有梵身諸天宮殿住。
	他化天上。梵身天下。於其中間。有摩羅波旬諸天宮殿。	其他化上梵身天下。於其中間。有魔波旬諸天宮殿住。
	倍梵身上。有光音天。	倍梵身上。有光音天。
	倍光音上。有遍淨天。	倍光音上。有遍淨天。
	倍遍淨上。有廣果天。	倍遍淨上。有廣果天。
	倍廣果上。有不羸天。	倍廣果上。有不羸天。
	廣果天上。不羸天下。其間別有諸天宮殿所居之處名無想衆生。	廣果天上不羸天下。其間別有諸天宮住。名爲無想衆生所居。
	倍不羸上。有不惱天。	倍不羸上。有不惱天。
	倍不惱上。有善見天。	倍不惱上。有善見天。
	倍善見上。有善現天。	倍善見上。有善現天。
	倍善現上。有阿迦尼吒諸天宮殿。	倍善現上。則是阿迦尼吒諸天宮殿。
	諸比丘。阿迦尼吒已上。更有諸天。名無邊空處。無邊識處。無所有處。非想非非想處。此等皆名諸天住處。	諸比丘。阿迦尼吒上。更有諸天。名無邊虛空處天。無邊識處天。無所有處天。非想非非想處天。此等盡名諸天住處。

娑婆世界	諸比丘. 如是處所. 如是界分. 衆生居住. 是諸衆生. 若來若去. 若生若滅. 邊際所極.	諸比丘. 如是之處. 如是界分. 衆生所住. 如是衆生. 若來若去. 若生若滅. 邊際所極.
	此世界中. 所有衆生. 有生老死. 墮在如是生道中住. 至此不過. 是名娑婆世界無畏刹土. 諸餘十方一切世界. 亦復如是.	是世界中. 諸衆生輩. 有生老死墮在. 如是生道中住. 至此不過. 是故說言娑婆世界無畏刹土. 自餘一切諸世界中. 亦復如是.
北 州	諸比丘. 須彌山王. 北面有洲. 名鬱單越. 其地縱廣. 十千由旬. 四方正等. 彼洲人面. 還似地形.	諸比丘. 須彌山王北面有洲. 名鬱多囉究留. 其地縱廣十千由旬. 四方正等. 而彼人面. 還似地形.
東 州	諸比丘. 須彌山王. 東面有洲. 名弗婆提. 其地縱廣. 九千由旬. 圓如滿月. 彼洲人面. 還似地形.	諸比丘. 須彌山王東面有洲. 名弗婆毘提訶. 其地縱廣. 九千由旬. 圓如滿月. 彼間人面. 還似地形.
西 州	諸比丘. 須彌山王. 西面有洲. 名瞿陀尼. 其地縱廣. 八千由旬. 形如半月. 彼洲人面. 還似地形. 諸比丘.	諸比丘. 須彌山王西面有洲. 名瞿陀尼. 其地縱廣八千由旬. 形如半月. 彼諸人面. 還似地形.
南 州	須彌山王. 南面有洲. 名閻浮提. 其地縱廣. 七千由旬. 北闊南狹. 如婆羅門車. 其中人面. 還似地形.	諸比丘須彌山王南面有洲. 名閻浮提. 其地縱廣七千由旬. 北廣南狹. 狀如車箱. 其中人面. 還似地形.
四面材質	諸比丘. 須彌山王北面. 天金所成. 照鬱單越洲. 東面天銀所成. 照弗婆提洲. 西面天頗梨所成. 照瞿陀尼洲. 南面天青琉璃所成. 照閻浮提洲.	諸比丘. 須彌山王北面. 以天金所成. 照鬱多囉究留洲. 東面以天銀所成. 照彼弗婆毘提訶洲. 西面以天頗梨所成. 照彼瞿陀尼洲. 南面以天青琉璃所成. 照此閻浮提洲.
大 樹	諸比丘. 鬱單越洲. 有一大樹. 名菴婆羅. 其本縱廣. 有七由旬. 下入於地. 二十一由旬. 高百由旬. 枝葉垂覆. 五十由旬.	諸比丘. 其鬱多囉究留洲. 有一大樹. 名菴婆囉. 其本縱廣七由旬. 下入於地. 二十一由旬. 出高百由旬. 枝葉垂覆五十由旬.
	諸比丘. 弗婆提洲. 有一大樹. 名迦曇婆. 其本縱廣. 亦七由旬. 下入於地. 二十一由旬. 高百由旬. 枝葉垂覆五十由旬.	諸比丘. 其弗婆毘提訶洲. 有一大樹. 名迦曇婆. 其本縱廣七由旬. 下入於地. 二十一由旬. 出高百由旬. 枝葉垂覆五十由旬.
	諸比丘. 瞿陀尼洲有一大樹. 名鎮頭迦. 其本縱廣. 亦七由旬. 乃至枝葉垂覆. 五十由旬. 於彼樹下. 有一石牛. 高一由旬. 以此因緣. 名瞿陀尼 【隋言牛施】	諸比丘. 瞿陀尼洲. 有一大樹. 名鎮頭迦. 其本縱廣七由旬. 乃至枝葉覆五十由旬. 而彼樹下. 有一石牛. 高一由旬. 以此因緣故. 名瞿陀尼洲.
	諸比丘. 此閻浮洲. 有一大樹. 名曰閻浮. 其本縱廣. 亦七由旬. 乃至枝葉垂覆. 五十由旬. 於此樹下. 有閻浮那檀金聚. 高二十由旬. 以此勝金出閻浮樹下. 是故名爲閻浮那檀. 閻浮那檀金者. 因此得名.	諸比丘. 此閻浮洲. 有一大樹. 名曰閻浮. 其本縱廣. 七由旬. 乃至枝葉覆五十由旬. 而彼樹下. 有閻浮檀金聚. 高二十由旬. 以金從於閻浮樹下出生. 是故名爲閻浮檀. 閻浮檀金. 因此得名
	諸比丘. 諸龍金翅所居之處. 有一大樹. 名曰拘吒摩利. 其本縱廣. 亦七由旬. 乃至枝葉垂覆. 五十由旬.	諸比丘. 諸龍金翅. 所居之處. 有一大樹. 名曰拘吒摩利和. 其本縱廣七由旬. 乃至枝葉覆五十由旬.
	諸比丘. 阿修羅處. 有一大樹. 名善畫華. 其本縱廣. 亦七由旬. 乃至枝葉垂覆. 五十由旬.	諸比丘. 阿修羅處. 有一大樹. 名修質多囉波吒羅. 其本縱廣七由旬. 乃至枝葉覆五十由旬.
	諸比丘. 三十三天. 有一大樹. 名曰天遊. 其本縱廣. 亦七由旬. 下入於地. 二十一由旬. 高百由旬. 枝葉垂覆. 五十由旬	諸比丘. 三十三天. 有一大樹. 名波利夜多囉瞿比陀囉. 其本縱廣七由旬. 下入於地二十一由旬. 出高百由旬. 枝葉覆五十由旬.